［課程－２］

審査の結果の要旨

氏名　関根　一貴

観察データを用いた傾向スコアマッチング分析の結果、ネパールの 15 歳から 49 歳の既婚女性において、児童婚は現代的な避妊のニーズが満たされていないリスクと意図しない妊娠のリスクが高いことが明らかになった。バランステストの結果、傾向スコアのマッチングが成功したことで、測定された共変量を条件として、治療群と対照群の間で交換可能性が達成されたことが示された。

質的調査に参加した女性たちは、避妊具の使用について独立した決定を下す力を与えられていなかった。家父長的な規範や夫婦間の力関係の不均衡により、結婚している思春期の少女たちは、家族計画について夫に話すことをためらったり、控えたりして、避妊に関する意思決定権が制限されていた。結婚後すぐに子どもを産まなければならないという社会的圧力は、不妊や放棄への恐れ、子どものいない夫婦への汚名を助長し、既婚の思春期の少女が家族計画サービスを利用する妨げとなった。義理の母親や宗教が、避妊具の使用に関する夫婦の意思決定に大きな影響を与えていた。家族計画の利点や方法に関する情報へのアクセスが限られているため、避妊薬の副作用に対する恐怖心や、思春期の妊娠に伴うリスクに対する意識が低いことが示された。プライバシーや機密性の欠如、医療従事者の不親切さなどの供給側の障壁が、女性が避妊具を求めることを躊躇させている。

本研究は児童婚に焦点を当てた初めての混合法による研究である。低・中所得国において、児童婚とリプロダクティブ・ヘルスの関連性を明らかにした研究はあるが、本研究は、傾向スコアマッチングを用いて児童婚がリプロダクティブ・ヘルスのアウトカムに与える影響を評価した初めての研究である。このマッチング手法は、選択バイアスや対照群と治療群の間の不均衡を大幅に軽減するのに役立った。また、本研究は、結婚している思春期の少女の避妊や出産に影響を与えるマルチレベルで相互作用する要因を明らかにした最初の質的研究の一つである。この研究は、女性の家族計画に関する知識を制限し、意思決定における女性の自律性を損ない、避妊具の使用を減らし、思春期の妊娠のリスクを高める要因の多次元性と相互作用を明らかにすることで、エビデンスベースを拡大した。

混合法の結果を統合して表現するための視覚的手段として、共同ディスプレイを使用した。量的研究と質的研究の統合された結果は、お互いにサポートし合い、これらの研究の間に補完的な関係があることを認められた。トライアンギュレーションによって、リプロダクティブ・ヘルスに対する児童婚の影響について、より広く、より深い洞察が得られた。2 つの研究の結果を合わせると、近代的な避妊法に対するニーズが満たされていないリスクや意図しない妊娠に対して、児童婚が悪影響を与えていることがわかる。また、出

産を延期するかどうかは、単に個人やカップルの個人的な選択ではなく、家族やコミュニティを対象とすることの重要性が示された。

これらの結果から政策的に重要な示唆が得られた。子供の頃に結婚した女性が直面している多次元的な脆弱性を軽減するためには、総合的なアプローチを採用すべきである。思春期の妊娠や意図しない妊娠を防ぐことの重要性についての知識と理解を深め、避妊のアンメットニーズを減らすために、少女たちに情報を提供し、エンパワメントのための介入を強化すべきである。男性と少年は、出産や家族計画に関するジェンダー規範や固定観念を変容し、これらの規範や固定観念が女性、少女、家族、コミュニティに与える負の影響に対処する取り組みに参画する必要がある。本調査で明らかになった根本原因に対処するためには、コミュニティの支援と集団的な行動が不可欠である。リプロダクティブ・ヘルスのプログラムと介入は、社会文化的背景を考慮し、女性のリプロダクティブ・ライツとジェンダー平等を強化することを目指すべきである。また、思春期の性と生殖に関する健康に人権に基づくアプローチを採用することは、女性がいつ子どもを産むか、何人産むかを決めるリプロダクティブ・ライツを行使する自律性を確保するために必要である。

よって本論文は博士（保健学）の学位請求論文として合格と認められる。